
 <会員のひろば>

小さな太陽光発電を全国に

都 筑 建 (東京都/エコテック代表・自然エネルギー事業協同組合理事長)

屋根の上からの鳥瞰図

新年早々から、私は三重県の松坂・津・鈴鹿の個人住宅の屋根の上に居た。太陽光発電システム設置の為、地下足袋で屋根職人として働いた。遠くに白い雪に被われた鈴鹿山脈と、四日市の高い煙突から強風にあおられて直角にたなびく多くの煙がみられた。

屋根の上から鳥の視線で見る家並は新鮮な風景を見せてくれる。しかし静かな佇いも、連日テレビで放映される阪神大震災の生々しい絵図と重なる。家と家との間に張り巡らされた電灯線や電話線や地中に埋められている水道管や下水道が一瞬の内にズタズタにされてしまう危うさ。都市のライフラインが機能しなくなり30万人近くの人々が避難生活を送られねばならない現実、神戸等の町の賑やかさが目立てば目立つ程、強烈な衝撃を私達に与えてくる。

こんな時、今、設置して廻っている太陽光発電システムなどの分散型の社会であったなら、もう少し被災の仕方も違っただろうし、復旧も早かっただろう。利便を追い求め、大都市に一極集中するように押し進めたこれまでの文明感を根本から問うているようだ。

救助に飛んでゆきたい衝動に駆られながら、一つ一つ太陽光システムを設置するのが救助活動と同じ意味を持つのだと自分に言い聞かせていた。

そして同時に、以前に目のあたりにすることができた、チェルノブイリ原発やスリーマイル島原発の風景も幻影のように見えてくる思いがした。

あの巨大な原発も安全を強弁し、何十万人かの人々のエネルギー源となる利便さがまかり通った結果が何百万人の人々の健康や生活や社会を崩壊させる放射能汚染を引き起した。ベラルーシのチェチェリスクの保健所に体内残留放射能を測定し

に来ていたあどけない子供達を忘れることはできない。そして巨大な事故炉「石棺」に圧倒されて無力感に襲われたことが阪神大震災で呼び起され、さらに私自身が被爆したナガサキの焼野原までも連らなっていった。もし、もう一つの生き方として、たとえ小さくともこのクリーンエネルギーを設置してゆこうとしている自分がいなければ、より衝撃や無力感は大きく深いものになってゆくのだろう。

今、三重県の都市の屋根にポツーンと太陽光パネルが孤立したように在っても、数年の内に、近隣の屋根にも、さんさんとふりそそぐ太陽光を受けて輝くパネルをみることができるだろう。

太陽光発電補助事業とは

私が必死になって取組んでいるのは国庫補助事業としてやっており、電力会社の送電線をバッテリー替りにして売買電のできる、いわゆる系統連続システムである。

この補助事業は、政府が「新エネルギー導入大綱」としてまとめ、電力エネルギー源を石油や石炭などの化石燃料（もちろん、危険きわまりない原子力も）から太陽光発電などへの切替えを目指すもの。現在の4メガワットの太陽光発電供給量を2010年までに4600メガワットにする計画の一つである。欧米で、同じ様な補助事業（日本の補助額は少なすぎるのだが）を契機に自然エネルギーの普及が急激に伸びた実績になったもの。

昨年1994年より始り、通産省の窓口として「新エネルギー財団」がなっている。個人住宅（既築・新築を問わない）への設置を対象にしており、これまでのメーカーや業者を限定したりする補助事業とは違う際立った特色をもっている。総工事の半額を完了後に交付することになっている。（4～5人の平均家庭の電気量は平均的に3KWとい

われ、設置工事費は昨年度は500～600万円であった。補助額は250～300万円となる。) 3年間のモニター(月々の売買電の電力量の記録と若干のアンケートに答える程度のもの)が義務付けられている。この意味ではテスト事業の域を出ておらず、早く普及事業にすることが望まれている。

工事をしながら、通産省や電力会社と接渉してみ、一つの感慨にとらわれてしまった。これまで、独立型(バッテリーに蓄電するやり方)の太陽光システムの普及を図って来た者にとって、電力会社の独占事業を守る為に電気事業法違反をたてに闘争とっていいような苦勞や苦汁をなめさせられて来た。それが海外からの圧力と電気料金の国際比較価格の高さ引下げの内圧とで、ここ1～2年の内に急激に変わり、逆に積極的に普及を図るようになった。それこそポッパタをつねってみたくなる程である。

自然エネルギー事業協同組合

レクスタの誕生

94年10月29日の池袋・東京芸術劇場での設立記念講演を実質の旗上げとして「レクスタ(REX TA)」は発足した。参加の15事業体のメンバーは前述の先駆的にこれまでやって来た苦勞組である。設立趣旨(要約)でも言うように、「大規模で一極集中したシステムより成り立った現代社会の行きづまりを解決する方法が、地元のエネルギー源を使った小規模で分散した多種のシステムの組合せにあり、自然と調和がとれ、精神的にもより豊かな次の社会を作る方法を見い出そうとしています。又、この社会的行づまりを大量生産大量消費をもとにする大規模な企業システムにゆだねず、問題提起としての告発の領域から積極的に事業そのものを担ってゆこうとしています。小規模分散型の社会を作ってゆくことは又、自然エネルギー利用の普及を図ってゆくことと不可欠に結びついており、さらに、もっと広く、生活のあらゆる面で自然をとり入れてゆくことを指向している」

阪神大震災を見れば、この問題提起と実行はよ

り光ってくる。

レクスタ関係の昨年度の太陽光発電補助事業の実績は、申し込み55件。第一次決定30件。辞退者7件(内、阪神震災関係1件)。最終受注数34件。

県別 三重県9/愛知県8/東京4/静岡県5/神奈川県1/茨城県1/千葉県1/岡山県1/島根県1/秋田県1/岩手県1/徳島県1となった。エコテックは三重の9件を完成させ、現在、すでに発電中である。工法も屋根瓦を加工することのない「吊り工法」が特色で、好評である。

今年度は5月中旬より補助事業の募集受付が始まり、6月中旬(予定)にメ切られる。実績と体制を整えた今回はエコテックもレクスタのメンバーも、より普及拡大を目指している。

エネルギー意識革命

太陽からの自然エネルギー(太陽光・熱・風力・水力・バイオガスなど)を代替エネルギーなどと呼んでいる古い感覚では次代は切り開けない。

太陽光(風力)発電で売買可能になって一番戸惑ったのは電力会社の社員達だろう。「電力は売ってやるものであり、逆にそれを個人から買うなんて!」と。電力会社の既得権を犯すものに何んで積極的に協力しなければならないのかと考え、高見に居たのを引きずり下された気分のような。しかし元々エネルギーを独占すること自体が特別なことだと早く気付くべきだろう。

NTTが通信の独占から回線貸与業に変換したように電力会社も事業のあり方を電線を活用したものにしてく契機がこの太陽光発電の系統連継だろう。日本の原発行政が国際的な捕鯨問題の二の舞になって孤立してくことも目に見えている。太陽光発電を個人住宅に付けて何が一番変わったかといえば、自分の電力を大切にしようとする意識だろう。逆に言えば無駄な電気は消そうとし使うまいとする。さらに社会全体としても、DSM(デマンドサイドマネジメント=電力需要を下げ、設備コストを削減するために投資するという考え方)などの制度の取り入れは有限なエネルギーを考える上で不可避なことだろう。